

1. 研修プログラムの目標と特徴

日本整形外科学会研修認定施設であり、整形外科専門医の指導のもとで整形外科医としての基礎的な研修を行う。

整形外科専門医をめざす者は、研修開始と同時に、日本整形外科学会への入会を必要とする。なお、東北大学整形外科では、専門医取得前の医師を専修医と呼んでおり、大学としても専修医のためのさまざまなセミナーなどの研修プログラムを準備している。

当院での研修期間についての定めはないが、1年～3年で希望する期間とする。当院は東北大学整形外科の関連病院であり、おおむね卒業後10年程度までは、大学病院も含めた複数の病院で研修することになっている。

東北大学整形外科への入局は義務ではないが、他大学を含めた整形外科医局に入局しないまま当院に年余にわたって勤務することは原則として推奨していない。

2. 入院診療

整形外科入院患者の術前管理・術後管理、術後のリハビリテーション等につき、チームの一員として積極的に参加する。

整形外科特有の治療法を学び、一人のできるようになることを目標とする。

- ・直達牽引、介達牽引
- ・脊髄損傷に対するステロイド投与
- ・ヘパリン置換
- ・抗生剤の使い方
- ・抗血栓療法
- ・回収血の返血
- ・術後の創処置
- ・ドレーンの管理
- ・後療法の進め方
- ・入院時のインフォームドコンセント
- ・手術のインフォームドコンセント
- ・地域連携パス

3. 急患診療

勤務時間内および勤務時間外の救急患者について、整形外科に依頼があった場合は断らずに対応する。勤務時間内においては、後期研修医がファーストコールとなるが多くなるものと思われる。勤務時間外は当番表に従うが、在院中は当番外でも積極的にかかわることが望ましい。

急患診療においては

- ・基本的な創傷処置
- ・骨折の整復・ギプス固定
- ・脱臼の整復
- ・緊急性の判断
- ・入院治療の適否
- ・高次の医療機関への搬送の適否

など、専門的かつ迅速な判断・処置が必要であり、上級医と相談して治療にあたる。

4. 手術

後期研修期間においては、四肢の骨折観血的手術を主体として修練を積む。症例数が多い、大腿骨近位部骨折に対する骨接合術・人工骨頭置換術、四肢長管骨骨折に対する髓内釘固定・プレート固定などの手術は術者として執刀させる予定である。

術前には、手術適応についてカンファレンスを行い、手術手技書、解剖アトラスでの予習が必要である。術後には遅滞なく手術記録を記載し、復習を行う。

変性疾患に対する手術、高度専門技術を要する手術については、助手として参加する。将来のサブスペシャリティーを決める端緒になりうる経験であるので、可能な限り手術に加わることが望ましい。

5. 外来診療

整形外科においては外来診療に追われる傾向がどこの病院にも見られ、当院も例外ではない。しかし、日常の外来診療の中から手術適応の患者を的確に選択することは病院医療の根幹であり、外来診療は重要である。

週 2 回程度の外来診療を担当させる予定であり、上級医の指導を受け、診療にあたるものとする。

外来診療においては、薬物療法のほか、

- ・注射手技(関節注射、神経ブロック)
- ・骨折および脱臼の整復と固定
- ・装具の処方

など、整形外科に特有な治療手技があり、これらを習得する必要がある。

また院内・院外からの紹介状・診療情報提供書には、遅滞なく丁寧な返信を行う習慣を身につける。

整形外科では、交通事故診療、労災診療などの医療制度にも精通する必要があり、これらについても早急に理解し、適切な患者指導を行うことが必要である。

6. 指導責任者・研修指導医・スタッフ

指導医 上級医名	役職	卒業年	主な資格など	専門分野	臨床研 修指導 医
中山 明里 (なかやま あかり)	整形外科長	1986 年	日本整形外科学会整形外科専門医 医学博士	股関節・関節鏡	○
小川 和浩 (おがわかずひろ)	整形外科医長	2003 年	日本整形外科学会整形外科専門医	股関節・外傷	○
千田 優子 (ちだ ゆうこ)	整形外科医長	2005 年		外傷・骨粗鬆症	○

7. 2015年度実績

総手術件数 481 件